

り。川の南を鳴野と云て廣野なり。城の東は鷺嶋とて、城と鷺嶋との間に大なる沼あり。寄手今福は佐竹氏、今福と鳴野の間は堀尾山城守、鳴野は上杉景勝其外小身衆也。今福の堤を堀切て、矢野和泉といふ鐵炮頭守之。二十六日佐竹氏の先手澁江内膳といふ者、未明に堤の陰に忍寄り、不意に起り、和泉並足輕七八人討取。城より此反報に木村長門守・後藤又兵衛・渡邊内藏助出で、澁江を討取り、佐竹氏の備へ打懸る。佐竹よわくと引取り、堀切を越させて不殘可討取とする所を、堀尾山城守生年十六歳にて、自身采幣を振て横合に突懸り數多討取、手の者も三十餘人戦死す。長門守・又兵衛は直に鳴野へ赴き景勝と戦ふ。田邊與右衛門・川田六左衛門鎗を以て、上杉氏の家臣杉原常陸と相戦ふ。三人ともに手負て相互に引く。内藏助は戰場へ不赴、城内へ引たり。眞田左衛門佐は東南の方に出丸を築き守之。十二月四日朝霧深く起る其紛れに、加賀・越前の兩軍押寄す。城中より鐵炮甚敷打之、寄手敗北す。眞田手へ首八十三取之。城内には手負登人なり。越前の手より松平出羽守生年十五歳、狸々緋の羽織を着し披群の働にて手負ひぬ。爲上使安藤帶刀來

る。扱兩國の軍勢は引舉たり。十二月十四日夜、城内より蜂須賀阿波守陣所へ夜討す。大野主馬・瑞團右衛門・米田監物・御宿越前・上條又八・宮與三郎・下澤彦太夫・吉田七左衛門等、竹束の裏迄押來て破之。蜂須賀氏より稻田修理・其子九郎兵衛・山田織部・樋口内藏助・森甚五兵衛・其子甚太夫・岩田七左衛門七人働ありて御感狀被下之。中村式部は戦死なり。松平左衛門督仕寄より鐵楯を八人にて持出で寄けるを、城中より大炮にて大に敗北し、其楯を棄てたり。城中より大に笑之。河田八助と云ふ大力者見之走歸り、橋の上に乗たる鐵楯を引かづ候所を、城より八助が胴中を鐵炮にて打ぬきぬ。八助少しもひるまず、味方の陣へ立歸り楯を渡せり。手負は具足ぬぐ事惡しとて、着ながら湯漬飯を食鉢に一つ喰べたり。其後具足をぬぎぬれば、鐵丸うしろの方下着にとまりて有り。重さ六匁玉也と云ふ。終に床にもつかず本復せりと云。

一、陽廣公御夢想の句と百韻連歌
寛永二十年十月清泰夫人御産催しの旨金澤へ申來る。即日陽廣公御發輓御催し候て、同月二十二日御首途被遊候。廿七

日武州熊谷驛御出駕、輿中にしばらく御眠りの所、被蒙御夢想の句候よしにて御目覺られて、御視際に臨田小左衛門御供いたし罷越候を御呼、只今少し御睡眠の所御夢想を被得候とて御唱被遊候。

ひらくより梅は千里の香かな

小左衛門奉之、扱々目出度御夢想の句、追付若君御誕生と奉祝候。廿八日東都御齋なり。果して翌月十六日犬千代丸御誕生。參議公是也。此旨微妙公被爲聞、御夢想の句御披、百韻御興行有之候。其御懷紙多年相望し求之ども不得。享保九年十月我友高昌善太夫安定獲之、寫取て十年十一月爲某許借あり。百韻は別幅有之。此小説の中へは表八句を寫入と云。

ひらくより梅は千里の香かな

聲心よき宿の黄鳥

春になり朝の庭の雪晴て

光長閑にてらす池水

岩が根の浪も餓める夜半の月

陽廣公

微妙公

犬千代 作

昌 程

昌 佐

雨に猶影しげるらし村柳 相也

早苗そよめく小田の夕露 孝治

此連中に孝治・重成・廣直・定延の四臣の名あり。其苗字等追て可尋求也。定延は我祖青地四郎左衛門也。

一、鳩巢先生將軍家世嗣近習被仰付事

享保十年臘月十一日、鳩巢先生室直清を召して、老中列坐月番水野泉州を以て被命は、近年於高倉屋敷講談の儀被仰付候處、精に入相勤、殊に諸人の爲に罷成候旨被爲聽召候。依之大納言様御近習へ被爲加、御役料貳百俵被下候。御近習にて學問も發向仕候儀にとの思召に候旨。即日奥向の誓詞老中列坐の前にて被仰付、其後兩上様へ御禮被仰付候。同廿一日大納言様御誕辰に付、御近習へ御祝の酒餅等被下之、御本丸へ被成御座候。其節雪降申候。新助に雪の詩は無之やの旨御尋なり。當朔日以來三度雪降候得共、詩作は無之に付、其段出御の後に御近邊の衆中、兼ての詩は無之候とも、此御尋を以て詩作候て獻上可然の旨、則其日の趣を左の通に被述。

十二月二十一日拜謁西城。賦雪應旨二首。是日正